

## 主 文

原判決を破棄する。  
被告人を罰金五万円に処する。  
右罰金を完納できないときは金五百円を一日に換算した期間被告人を労役場に留置する。  
押収に係る別紙目録記載物件はこれを没収する。

## 理 由

本件控訴の趣意は末尾に添附した弁護人正木昊、同高橋銀治名義の控訴趣意書記載のとおりで、これに対し当裁判所は次のとおり判断する。

論旨第二点について。

原判決添付の没収品目録に絵葉書（袋入り）四〇八組同八一八九枚となつてゐるものが、実はA寺のいわゆる「秘仏」の写真で、これを絵葉書というのは正確でないこと所論のとおりである。しかし右物件は警察官が押収したとき以来、原審に於て証拠として提出され原裁判所に領置されるまで一貫して絵葉書として表示されて来たのであり、被告人も原審公判廷でこれを絵葉書と称している事実も存するのである。してみれば、原判決がこれを没収すべきものとして判示するに当つて、没収物件目録に絵葉書と表示したこと自体何等非議すべきではない。むしろ従前の表示どおり絵葉書とせず突如として判決中に写真何組と表示するが如きことは、場合によれば疑義を生じ、何を没収したか不明となる虞がないでもない。（本件ではかかる虞は絶無に近いと認められるではあろうが。）それ故原判決はかかる疑義を生じないようにするため、多少その実質とは異つていても、従前の取扱上の名称を踏襲し、絵葉書と表示したわけで怪しむに足りない。

〈要旨〉そこで右「秘仏」写真が猥褻物に該当するか否かをみるに、この写真に輯録されたものの第一、二輯合計十</要旨>二枚の中原審が猥褻物たることを否定した西蔵大聖歡喜天像とはりがたとを除いて爾余は性器そのものを表現しているか又は性器を人に擬え衣裳その他に宗教的な紛飾を施してあるか或は男女両性がことさら性行為中であることを暗示する姿態をとりつつ抱擁しているかであつていずれにせよ性器或は性交を表現したもののみなのであるから、人の性欲を刺激興奮せしめ、通常人の正常な性的羞恥心を害し、善良な性的道義觀念に反するものたること明白であり、刑法第一百七十五条の猥褻物に該当することはいうまでもないところである。

所論は

（一） 性器は古代社会に於て洋の東西を問はず、原始宗教の対象であつたし、今日もなお性器を神体として祀り、或は真面目に礼拝の対象としている多数国民のあることを否定し得ないところ本件写真の実物の多くは右の如き礼拝の対象物たりしものであり、本質上猥褻物ではない。

（二） 又「秘仏」は大正十三年以来多年A寺で展示され来り、戦時中は文芸品美術品に対する弾圧から一時封印しておいたが、戦後再び寺院の戦災による建物改築のための寄附金募集と地本a町の観光地としての繁栄のために下田警察署あてに公開を公認されるよう願書を提出し、これが静岡地方検察庁に申達された結果検察官から詳細な調査を受けたが、公開を禁止する旨の指示を受けておらず、被告人始めB町長達も公開を黙認されたものと信じて観覧に供して来たのであり、町を訪れた名士には町当局が、わざわざ本件秘仏写真集を贈呈するを常としたのみならず各地展覧会にも右写真の出品されたこと数多く、又学術書等にも本件秘仏写真が掲載されており、いずれも美術品又は学術品として扱はれてきた。

（三） 従つて秘仏自体本質的には猥褻物とは異なるのであるから、その写真も猥褻物といえないし、被告人は拝観者にも自ら案内説明をし未成年者等には拝観を許さないよう注意し、入場者でなければ写真は購入できなかったのである。然るに秘仏の陳列は罪とならないものとして起訴を受けず、特定の人々に直接販売する目的で所持した写真についてこれを犯罪と断じたことは民を網すもので刑法の目的に反する。

というのである。

思うに古代の社会では、人智も発達せず、性交、妊娠、出産という生命力の発生してくる由来を理解できないので、性そのものに神秘的な力を感じ、性器を崇拜するという風習を生じ、我が国各地に散在している社祠堂宇の類の中には現時なお性器を模した本件の「秘仏」と類似したものを以つて神体としているものがあり、地方民衆の尊崇を受けている事実を窺えないわけではない。しかし近代宗教は古代の性器崇拜から転化したものではなく、これと全然無関係なものであり、現時に於け

る性器崇拜的風習の遺物の如きも、その実性器を性器と知りつつ礼拝しているわけではなく、祭神の本体が何であるかを知らず、かつ又知ろうとせず、昔からのいいつつたえに従つて神聖なものとし畏み崇めていだけの事で、そのべ一ルを剥ぎ実体を白日の下に曝すならば、何人と雖もこれを崇拜するの愚をやめると至るであらう（証人Cの証言参照。）本件秘仏も同様であつて、その中には嘗つては民衆の崇敬の対象であつたかも知れないものも存するが、今や一個の蒐集品としてはA寺内に移されてしまえば聖なるものといいつたえを傳承する人とてなく、いわば宗教的ベールを剥がされた存在に過ぎないのである。してみればそれが嘗て民衆の尊敬を受けていたというだけでは、その本質が猥褻物であることを否定し得ないところといわなければならない。又、學術書に本件と同様の写真の一部が掲載されたり従前屢々展覽会に秘仏写真が出陳されたからとて、學術的或は美術的価値が（もしそのような価値があるととしても）その猥褻物と認定することを妨げるものでもない。

而して記録を調査するに、A寺は由来日蓮宗の一寺院であるが、同寺を詣でる人々は日蓮宗の信者とは限らないのであり、格別宗教的にA寺と結びついているわけではなく、単に行樂の旅路を、a町にとり、A寺の「秘仏」の事を聞きつたえてその觀覽を求めるもの大部分なのであるから、これらの人々は秘仏を見ることにより性的な刺激興奮を味はい獵奇心を満足させんとするにあつて秘仏を學問的に研究し、或は美術的に鑑賞しようというのではないことが明白であると同時に、A寺住職たる被告人もこの事を知り旅客の性的好奇心に媚びることにより収益を図らんがために、猥褻物たる秘仏を人々の觀覽に供し、その写真を販売してきたものと認められるのである。従つて右写真は不特定多数の觀光客に販売するためのもので所論のよ

うに特定の者のみに販売する目的であつたと云えないのであり、被告人が秘仏の觀覽に際し自ら案内説明し、未成年者には拝觀を許さない等多少の注意を払つていたとしても、被告人の所為が刑法に触れないものとすることはできない。なるほど被告人から秘仏の公開を許されんことを求めa警察署に願書を提出した結果、静岡地方檢察庁から秘仏の調査に来た事実及びその後秘仏の公開を禁止すべしとの指示を受けたことのない事実は記録上認められないではない。しかし被告人がそれ故に秘仏の公開を許されたものと信じていたとまでは認められないのみならず、本件処罰の対象となつた所為は右秘仏の公開自体ではなく、秘仏の写真を作成し販売の目的で所持したとの所為であり、このような所為は写真の携帯も容易でこれを買ひ求めた人々の手から更に転々することも考えられるし、従つていつ何処で何人の目に触れないでもないことを考えると、秘仏の觀覽を許すことよりも一層その弊害が大きいといわなければならない。それ故原審が右所為を処罰したことは当然で、所論のように民を網するなどという非難は当らず、論旨はそれ故いづれもその理由がない。

（その他の判決理由は省略する。）

（裁判長裁判官 近藤隆蔵 裁判官 吉田作穂 裁判官 山岸薫一）